

個人から組織へ、そしてまた個人へ

オーストラリアにおけるキェルケゴール哲学の受容に
ジュリア・ワトキンが果たした功績に敬意を表して

ウィリアム・マクドナルド
須藤孝也 訳

1. はじめに

オーストラリアにおけるキェルケゴール哲学の受容は、ゆっくりと少しずつなされてきました*1。受容に抵抗する潮流によって、妨害されてきたのです。キェルケゴールの著作の、最小規模の出版、指導、催しの企画でさえ、組織的な枠組みによってではなく、少数の個人の努力によって、なし遂げられてきました。しかし、このほど亡くなられたジュリア・ワトキン博士のご尽力に多くを負って、このような状況は変わろうとしているようです。単なる個人的関心と組織的枠組み——これは、オーストラリアにおけるキェルケゴールへの関心を継続的に刷新することに寄与します——との間に橋渡しをするのに、彼女の努力は不可欠でした。

このプロセスにおけるジュリアの功績を正しく評価するためには、オーストラリアにおいて、キェルケゴール受容が直面しなければならなかった様々な障害を理解する必要があります。また我々は、宗教哲学、大陸哲学、哲学的心理学、批判神学の諸分野において、組織を介しキェルケゴールを受容するだろう人々についても、把握する必要があります。細かい計画について言えば、私はこの研究を、オーストラリアにおけるキェルケゴールの哲学的受容に限定し、オーストラリアにおけるキェルケゴールの出現を、以下の側面

*1 オーストラリアにおけるキェルケゴールの哲学的受容史を、網羅的な文献表をつけてさらに詳しく扱ったものとして、William McDonald, "Kierkegaard's Philosophical Reception in Australia: An Archaeology of Silence," in Jon Stewart (ed.), *International Kierkegaard Reception*, Berlin & New York: Walter de Gruyter (forthcoming) を参照。

から精査しようと思います：(1) オーストラリアの大学における、哲学の学問的ポスト；(2) オーストラリアの哲学雑誌；(3) オーストラリアにおける哲学会議；(4) それ以外のキェルケゴールに関するリソース：協会、研究ネットワーク、特別企画。簡潔に話さなければならないので、オーストラリアにおけるキェルケゴールに関する出版物の中から代表的なものだけを用い、オーストラリア人著者によるものではありませんが、国際的に出版された議論については省きます。

2. 受容の文脈

オーストラリアにおいて哲学は、19世紀に各大学に学問的哲学者のポストが置かれることによって、初めて組織化されました。19世紀にオーストラリアの大学で哲学のポストを得たのは、皆、スコットランドで学んだ哲学者たちでした^{*2}。これらの哲学者たちの全員に影響を与えていたのは、ドイツ観念論をトマス・リード (Thomas Reid) の常識哲学に結合するウィリアム・ハミルトン卿 (Sir William Hamilton) の著作と、カントとヘーゲルの観念論との融合であるリチャード・ケード (Edward Caird) の著作でした^{*3}。

また、19世紀にオーストラリアの大学にポストを得た哲学者の多くは、プロテスタント神学をバックグラウンドとしてもっていました。しかしながら、彼らの神学的関心において支配的だったのは、哲学的観念論でした。1911年にメルボルン大学の第二哲学教授のポストを得たウィリアム・ラルフ・ボ

^{*2} 1986年、エジンバラ大学で教育を受けたヘンリー・ラウリー (Henry Laurie) が、メルボルン大学の精神ないし道徳の哲学の教授に任命された。1890年、シドニー大学は精神ないし道徳の哲学のシェリー教授職を設けた。その初代は、グラスゴー大学で教育を受けたフランシス・アンダーセン卿 (Sir Francis Andersen) だった。アデレード大学は、1874年に、英語学、文学、精神ないし哲学の教授ポストを設けた。その初代は、聖アンドリュー大学で教育を受けたジョン・デヴィッドソン (John Davidson) だった。アデレードにおいてデヴィッドソンの影響を最も受けた教授ポストの後継者、ウィリアム・ミッチェル卿は、エジンバラ大学で教育を受けた。Cf. S. A. Grave, *A History of Philosophy in Australia*, Brisbane: University of Queensland Press, 1984, pp. 14-22.

^{*3} S. A. Grave, *op. cit.* p. 24.

イス・ギブソン (William Ralph Boyce Gibson) は、「観念論哲学とキリスト教の間には深い親和性がある」^{*4}と述べました。ギブソンが心に抱いていたのは、キリスト教は、哲学的概念によってよりはっきりと言明される真理を、メタファーと象徴の形式において表現する、というヘーゲル的な議論でした。この状況においては、ヘーゲルの思弁哲学に対するキェルケゴールの批判は、ほとんど共感されませんでした。

20世紀の初めになって、オーストラリアの哲学者は、オーストラリア固有の哲学を発売したいと切望するようになりました。この切望は、哲学のみに妥当するものではなく、当時の芸術・文学の方面においても主要な動機となっていました。オーストラリアは、各州を連邦化することによって1901年に独立国家となりました。イギリスから独立した、オーストラリアの文化と地理にふさわしい国家アイデンティティの模索が、第一の問題でした。これは、哲学において特に困難な問題でした。というのも哲学は広く、国境を越えて普遍的な真理を扱う言説と見なされていたからです。しかしオーストラリアの哲学者たちは、アメリカのプラグマティズムがアメリカ合衆国に対して成し遂げたような役割を、自分たちもオーストラリアにおいて果たしたいと考えました。この役割は、一つには、オーストラリアで哲学教育を受けた新しい世代を大学講師に任命することで果たされる、と考えられました。また、プラグマティズムにおいてなされたのと類似した仕方、観念論と実在論を融合させることによっても果たされる、と考えられました^{*5}。

ヘーゲルの観念論がマルクスやフォイエルバッハの唯物論を生み出したように、スコットランドの観念論は、形而上学的実在論の種を内包していました。この実在論はすでに、ヒュームの経験論とトマス・リードの常識哲学のなかで、自らの条件を整えていました。1894年から1923年までアデレード

^{*4} W. R. Boyce Gibson, "Problems of Spiritual Experience," *Australasian Journal of Psychology and Philosophy*, vol. 2 no. 2, June 1924, p. 84.

^{*5} 例えば、以下を参照；E. Morris Miller, "The Beginnings of Philosophy in Australia," *Australasian Journal of Psychology and Philosophy*, vol. 7, December 1929, pp. 241-251; W. R. Boyce Gibson, "The Problem of Real and Ideal in the Phenomenology of Husserl," *Mind*, vol. 34, July 1925; S. A. Grave, *op. cit.* pp. 38-46.

で哲学講座を務めたウィリアム・ミッチェル卿 (Sir William Mitchell) の著作において、「実在論」の原理が、「観念論」の枠組みの中に、オーストラリア最大の重要性をもって登場しました*6。ミッチェルは、アデレード大学に心の哲学の問題を導入したことによって、重要な役割を果たしました。アデレード大学は後に、U. T. プレイス (U. T. Place) と J. J. C. スマート (J. J. C. Smart) の業績によって、心に関するオーストラリア唯物論の生誕の地になりました*7。

19世紀、大学と学校の両方において非宗教的な公共教育システムが確立され、オーストラリアで教育された哲学者たちの間では、キェルケゴールが受容されない状況ができてきました。当時の狙いは、宗教が教え込まれるのではなくて選択されるような、リベラルで民主主義的な国家体制の中で、情報に基づいて決定を下せるよう国民を教育するシステムを構築することでした。これは、特に脱退しない限り、デンマーク国教会の教区へ自動的に登録される当時のデンマークとはかなり対照的でした。キェルケゴールは、キリスト教圏に生まれたという理由でキリスト教を継ぐ者を厳しく非難しましたが、そのようなプロテストは、国民が何らかのセクト宗教に生まれることを何とか防ごうとするところでは、全く聞き入れられませんでした*8。

1935年、W. R. ボイス・ギブソンが亡くなり、メルボルン大学のポストは、息子のアレクサンダー・ボイス・ギブソン (Alexander Boyce Gibson) が引き継ぎました。アレクサンダー・ボイス・ギブソンは、オーストラリアの哲学雑誌においてキェルケゴールに言及しましたが、キェルケゴールに言及したのはまだ二人目でした (1948)*9。彼がオーストラリアの雑誌において再びキェルケゴールに言及したのは1966年でした*10。彼が二度目にキェルケ

*6 S. A. Grave, *op. cit.* pp. 22-23.

*7 James Franklin, *Corrupting the Youth: A History of Philosophy in Australia*, Sydney: Macleay Press, 2003, pp. 181-182.

*8 *Ibid* pp. 215-224.

*9 A. Boyce Gibson, "Critical Notice of Between Man and Man (Martin Buber)," *Australasian Journal of Philosophy*, vol. XXVI no. 1, May 1948, pp. 46-58.

*10 A. Boyce Gibson, "A Metaphysical Crotchet," *Sophia*, vol. V no. 2, July 1966, pp. 3-9.

ゴールに言及した後者の論文は、『*Sophia*：哲学的神学に関する議論のための雑誌』に発表されました。後に *Sophia* は、オーストラリアの哲学雑誌のうちでキェルケゴールに関する論文を最も多く掲載するようになりますが、元々はマックス・チャールズワース (Max Charlesworth) を創始編集者として、メルボルン大学で出版されたものでした。1940年代と1950年代においては、メルボルン大学のポストは、ウィトゲンシュタインに関心をもつ数名の哲学者に与えられ、言語はいかに使われているかという問題に周到な注意を払うことによって哲学の問題を解決しようとするのが、メルボルン哲学の一つのメルクマールとなりました。また1940年代にメルボルン大学は、科学史と科学哲学のためのセンターを創設しましたが、これは世界で最も古いセンターのうちの一つであり、オーストラリア哲学の中心地であり続けています*11。

アレクサンダー・ボイス・ギブソンがシドニー大学の哲学のポストにあった当時の同僚は、グラスゴー大学で数学、物理学、そして哲学を学んだジョン・アンダーソン (John Anderson) でした。アンダーソンは、それまで誰もなしえなかったほど強力にシドニー哲学を牽引しました。彼は、国民に知られた最もはつきりともを言う著名な知識人でした。彼は厳格な経験論者で、聖職者を批判することに喜びを見出す恐ろしい批判家でした。アンダーソンは、1927年から1958年までシェリー教授職を務めました。アンダーソン流の経験論とメルボルンのウィトゲンシュタイン主義は、これを座礁する形而上学（形而上学が宗教が同化される）の時代として特徴付けました*12。アンダーソンの確固たる経験的実在論は、デイヴィッド・アームストロング (David Armstrong) やデイヴィッド・ストーヴ (David Stove)、ジョン L. マッキー (John L. Mackie)、ジョン・パスモア (John Passmore) といった新しい世代の有能な哲学者たちを押し潰しました。1960年代に、この実在論がアデレードで発達した心の哲学へと伝播されると、オーストラリア哲学は、が

*11 James Franklin, *op. cit.* p. 135.

*12 S. A. Grave, *op. cit.* p. 99.

ちがちの唯物論主義一色となりました。これを最も強力に論じたのは、デイヴィッド・アームストロングと J. J. C. スマートでした。この還元論的な心の理論は、精神や超越を匂わせるもの全てに対して敵対的でした。これに続く 1970 年代と 1980 年代、オーストラリア哲学は、英米分析哲学と大陸哲学の間でのイデオロギーの不一致によって分裂していました^{*13}。前者の陣営は、科学、論理、言語の哲学に同化し、他方後者は、哲学の分析的な概念へと組み込まれる、言語化されない政治的な諸前提を明らかにしようとしていました。オーストラリアの大陸系の哲学者たちは、もっぱらフランス哲学から、特にアルチュセール、ラカン、フーコー、デリダ、ドゥルーズの仕事からインスピレーションを得ました。また彼らは後に、クリステヴァ、シクスー、イリガライ、ル・ドゥフといったフランスのフェミニストたちに対して、それらの伝統に対するニーチェの重要性を認めつつも、にわかな関心を寄せていました。サルトルとともに実存主義を斥けたフランスの新左翼の思想家たちの仕事に立脚する、この強硬的な政治哲学においては、19 世紀のキリスト教実存主義者に対してシンパシーが抱かれることはほとんどありませんでした。

この 15 年間、分析哲学と大陸哲学との間にある溝を埋めようとする、いくつかの顕著な試みがなされてきました。そして 21 世紀には、両陣営の相互排除は、幾分無用のものとなりました。1989 年、ドーキンスの高等教育改革は、構造を根本的に変えました。オーストラリアの大学を、公的組織からますます民営化された法人へと変えたのです。学問の自由ないし平等な協力体制を脅かすものに対する恐れが共有され、これが分析哲学と大陸哲学の間の和解を押し進めました。この変化はまた、内容のない、生産のためのリサーチの生産という文化を助長しました——結果として生ずる出版物は、出資されうるリサーチ量として、科学省、教育省、労働教育省の基準を満たしさえすればよいのです。その結果として、オーストラリア人による、ないし

^{*13} Cf. Richard Campbell, "The Covert Metaphysics of the Clash between 'Analytic' and 'Continental' Philosophy," *British Journal for the History of Philosophy*, vol. 9 no. 2, 2001, pp. 341-359.

オーストラリアの雑誌における、キェルケゴールに関する出版物の40%以上が、この10年間になされました。

グローバルな電子コミュニケーションと、海外旅行が比較的容易になったことによって、地理的な孤立が解消され、キェルケゴールに関する関心は、最近ますます表現されやすくなってきました。そしてこれは、オーストラリアにおける故ジュリア・ワトキン博士の存在によって、さらに加速されました。博士は、オーストラリア・キェルケゴール協会を設立し(1994)、*Søren Kierkegaard Society Bulletin* を編集し(1995-1997)、毎年開催されるオーストラリア哲学協会会議で二度キェルケゴールに関する一連の発表をとりまとめ(1995,1996)、ウェブサイト *International Kierkegaard Newsletter* を主催し(1994-2005)、タスマニア大学でキェルケゴールとニーチェに関する講座を担当し(1999-2002)、同大学においてセーレン・キェルケゴールの研究グループに継続的に携わり(1994-2003)、2003年にはメルボルン大学のオーモンド・カレッジの共同神学図書館に、キェルケゴール文献のマランチュック記念コレクションを寄贈しました。このコレクションの存在は、日本キェルケゴール協会が、その第一回国際会議をメルボルン大学で開催することに決めた大きな理由の一つとなっています。

マランチュック記念コレクションは、オーストラリアにおけるキェルケゴール研究に対し、組織的基盤を提供するものです。これは、南半球最大の、キェルケゴールに関する研究リソースのコレクションです。ジュリア・ワトキンは初めこれをタスマニア大学に寄贈しようと申し出ましたが、この申し出は受け入れられませんでした。しかし、タスマニア大学はオーストラリア本土からあまりに孤立していて、研究旅行が容易ではないので、このことはオーストラリアにおけるキェルケゴール研究にとっては幸運です。このコレクションがメルボルン大学にあることにより、多くのより有望な研究者たちがこれに触れることができます。また恐らく、*Sophia* を生み出したこの大学が、オーストラリア最大のキェルケゴール研究コレクションを所蔵するというのもふさわしいことです。

3. オーストラリアの哲学雑誌における受容

オーストラリアの哲学雑誌でキェルケゴールが始めて言及されたのは、1947年のグイド・デ・ルジエロの『実存主義』の書評においてでした^{*14}。この書評記事でA. M. リッチー (A. M. Ritchie) は、オーストラリアにおいて実存主義が相対的に軽視される原因を、地理的孤立、「戦争によって悪化させられた孤立」と、「政治的権威主義と経済的・政治的な検閲」とに帰しました^{*15}。リッチーは、1940年にジョン・ワイルド (John Wild) が *Philosophical Review* でキェルケゴールに関してなした「現在、その影響が〔キェルケゴール以上に〕大きなものと感じられる近代の哲学者を挙げることは、非常に難しい」という言葉を引用し、オーストラリアではこの言葉は、「1947年においてなおナンセンスに聞こえるだろう。全く、キェルケゴールという名前さえまだほとんど知られていない」^{*16}と述べています。

オーストラリアの哲学雑誌におけるキェルケゴールに関する次の三つの言及もまた、著作の書評においてなされました^{*17}。これらの論文はどれも、キェルケゴールを実存主義に分類しました。これらの論文は全て、この哲学潮流に対するキェルケゴールの重要性を主張しましたが、キェルケゴールに

^{*14} A. M. Ritchie, "Critical Notice of Existentialism by Guido de Ruggiero," *Australasian Journal of Philosophy*, vol. XXV, 1947, pp. 174-184.

^{*15} *Ibid* p. 174. 戦時下のイギリスでは、常時、本が足りなかった。また政府の「戦争の妨げになると思われる文学の厳しい検閲」、「安全な」本だけを注文するための図書館ないし本屋に対する助成、これは、オーストラリア同様ニュージーランドにおいても、実存主義の文献を入手するのが非常に困難であったことを意味する。Cf. Dale Benson, "Pop-Existentialism in New Zealand," *Kotare: New Zealand Notes & Queries - A Journal of New Zealand Studies*, June 2005, p. 1.

^{*16} A. M. Ritchie, *op. cit.* p. 174.

^{*17} A. Boyce Gibson, "Critical Notice of Between Man and Man (Martin Buber)," *op. cit.* pp. 46-58; G. Stuart Watts, "Review of The Perennial Scope of Philosophy (Karl Jaspers)," *Australasian Journal of Philosophy*, vol. XXIX no. 1, May 1951, pp. 58-65; Henry Thornton, "Review of Karl Jaspers et la Philosophie de L'Existence by Mikel Dufrenne et Paul Ricoeur," *Australasian Journal of Philosophy*, vol. XXIX no. 1, May 1951, pp. 130-131.

対して批判的であり、主にハイデガーやブーバー、ヤスパースといった後続する哲学者や神学者の先駆けとして、キェルケゴールに注目しました。これらの論文は全て、*Australian Journal of Philosophy* に掲載されました。これ以外に、1969年から2002年までの間に *Australian Journal of Philosophy* に発表されたキェルケゴールに関する書評記事は、4本だけでした^{*18}。この雑誌に発表された研究論文には、キェルケゴールを専門に扱うものはありませんでした。書評記事しかなかったのです。

1951年5月から1963年7月までの間、オーストラリアの哲学雑誌は、キェルケゴールに関しては沈黙していました。キェルケゴールに関する5番目の言及が、*Sophia* での最初のものでした^{*19}。この雑誌はその後、キェルケゴールに関する論文を最も頻繁に掲載したオーストラリアの雑誌になります。1966年から1999年の間に17本の論文が掲載されました。しかしながら *Sophia* に掲載されたキェルケゴールに関する論文は、二本を除いては、全てオーストラリア出身ではない哲学者によって書かれたものでした。*Sophia* でキェルケゴールに言及する二つめの論文は、キェルケゴールにおける主体性と宗教的真理の概念をウィトゲンシュタイン流に取り扱う、D. Z. フィリップス (D. Z. Phillips) によるものです^{*20}。*Sophia* のキェルケゴールに関する論文の多くは、次のような形式のタイトルになっています：「キェルケ

^{*18} これらはそれぞれ George Schrader, *Existential Philosophers: Kierkegaard to Merleau-Ponty* (by Leslie Griffiths, 1969) の、あるいは Jacques Derrida, *The Gift of Death* (by Andrew Johnson, 1996) の、あるいは Alastair Hannay and Gordon Marino (eds), *The Cambridge Companion to Kierkegaard* (by William McDonald, 1999) の、あるいは Mark Dooley, *The Politics of Exodus: Kierkegaard's Ethics of Responsibility* (by William McDonald, 2002) 等の書評であった。

^{*19} Patrick Hutchings, "Do We Talk That Nonsense?" *Sophia*, vol. II no. 2, July 1963, p. 12. この論文でハッチングスは、ごく簡単な余談においてキェルケゴールに言及するだけである：「ここでは、非宗教的な人間は、宗教を馬鹿げていると批判することができる。しかし批判したところで、この上なく穏やかなローディセアンに、自分はキェルケゴール的な [原文のまま]、ドン・キホーテ的な歓喜に値しない、と思わせることはできないだろう」。

^{*20} D. Z. Phillips, "Subjectivity and Religious Truth in Kierkegaard," *Sophia*, vol. VII no. 2, July 1968, pp. 3-13.

ゴールにおける X と Y」あるいは「キェルケゴール：X と Y に関して」あるいは「キェルケゴールと X」。これは、オーストラリアでは 1960 年代においてすら、著者たちはキェルケゴールに関する詳細な知識それ自体を有用なものとして認めることができなかつたということの意味をしています。彼らは、分析的な宗教哲学において流通している概念との関連において、キェルケゴールの著作を取り上げなければならなかつたのです。

Sophia の論文の大半は、論理分析の立場からのものです。この雑誌の最初の 10 年間の論文の多くは、アントニー・フルー (Antony Flew) とアラスデア・マッキンタイア (Alasdair MacIntyre) によって編集された『新哲学的神学論文集』*²¹ という非常に影響力のあつた文献を参考にしていました。この文献には、J. J. C. スマートと C. B. マーティン (C. B. Martin) という二人のオーストラリア人と、G. E. ヒューズ (G. E. Hughes) と A. N. プライアー (A. N. Prior) という二人のニュージーランド人の著者が執筆した章があります。こうした状況のもと、1960 年代の *Sophia* に、キェルケゴールに関する論文を発表して研究に貢献したのは、オーストラリア人ではありませんでした*²²。

1960 年代の *Sophia* におけるキェルケゴールに関する論文はすべて、主に宗教における理性の役割に注目するものであり、キェルケゴールを非合理主義者として片づけようとする説に反論することに関心をもっていました。アレクサンダー・ボイス・ギブソンは、「理性の流儀によって神の流儀を讃美しようとする企てに関するクリティーク」*²³を探究し、これを『哲学的断片』に見出します。彼は、宗教において理性を利用する、最も強力なクリティーク

*²¹ Antony Flew and Alasdair MacIntyre (eds), *New Essays in Philosophical Theology*, London: SCM Press 1955.

*²² D.Z. Phillips, *op. cit.* (p.6) は、John F. Miller III in “The Logic of Scientific and Religious Principles,” *Sophia*, vol. XII no. 3, October 1973, p. 13. と同様に、直接に *New Essays in Philosophical Theology* に言及する。Cf. George Stack, “Kierkegaard and the Logical Possibility of God,” *Sophia*, vol. VII no. 2, July 1968, pp. 14-19; Leroy T. Howe, “Kierkegaard on Faith and Reason,” *Sophia*, vol. VIII no. 1, April 1969, pp. 15-24.

*²³ A. Boyce Gibson, “A Metaphysical Crotchet,” *op. cit.* p. 3.

クを展開したものと、このテキストを捉えるのです。彼は「宗教において理性が果たす役割の洗練された擁護論——古い確信に満ちた擁護論は、我々の以前に『哲学的断片』の』中で突き崩されてしまっている——」*24を賞讃するために、クリマクスが行ったクリティークを論理的に再構築しようとしています。

「キェルケゴールと神の論理的可能性」において、ジョージ・スタック (George Stack) は、神は存在するという言明の認識論的ステータスを、キェルケゴールの用語を用いて分類しようと試みます。彼は、この言明は、「〈推論による〉事実に関する言明」ではないし、「必然的に真」*25でもない、と結論します。むしろキェルケゴールによれば、「理性の観点からすれば、神は、論理的に可能な存在であり、その存在がいかなる矛盾も含まないものである」*26。しかしながら、神は存在するという主張を信じるためには、客観的反省ではなく、信仰が必要となります。スタックは「キェルケゴールは、カントと同様に、理性の限界を明らかにするために理性を使ったのである」*27と述べて、これによって非合理主義の擁護論者としてのキェルケゴールという一般的な理解に反論します。

1970年代の *Sophia* の論文は、全てキェルケゴールに対して批判的です。例えば、ジョージ・クリシデス (George Chryssides) は、「倫理的なものの神学的保留」の概念に関して、「キェルケゴールの『畏れと戦き』のどこに意味論上の混乱とおぼしきものがあるのかを示」*28そうとしています。キェルケゴールにとってアブラハムの信仰は、道徳の「普遍的な」要求と、神に対する「個別的な」(そして最も優先される) 従順との間の峻別に拠っている、とクリシデスは論じます。クリシデスは、言葉の意味は決して個別的なものではありえず常に普遍的なものである、という準-ウイトゲンシュタイン的

*24 *Ibid* p. 3.

*25 George Stack, *op. cit.* p. 16.

*26 *Ibid* p. 17.

*27 *Ibid* p. 15.

*28 George D. Chryssides, "Abraham's Faith," *Sophia*, vol. XII no. 1, April 1973, p. 10.

な議論を用います。すなわち、アブラハムの信仰の個別性についても、これを伝達するために言葉を使用する限りで、キェルケゴールはこれを普遍化します、つまり苦心して設けた区別を自ら無効にしてしまうのです。クリシデスは、「本質的に隠喩的である言語に対して不当にも直解的な解釈」*29を加えるという間違いを犯したとして、キェルケゴールを批判します。

1983年以前の *Sophia* の論文はどれも、キェルケゴールの著作活動のレトリカルな構造についても、様々な仮名を用いたパースペクティブについても、考慮していません。それらを考慮することなく、仮名テキストで表明されている見解を全てキェルケゴールに帰します。言及されることの最も多かったテキストは、『畏れと戦き』、『哲学的断片』、『後書き』です。

しかしながら 1980年代の論文の多くは、個々のテキストに細心の注意を払い、仮名による見解に敏感です。例えば、アブラヒム・カーン (Abraham Kahn) の論文は、キェルケゴールの〈救い〉の概念を、それと結びつけられる言葉やそれから区別される言葉との関連において分析するために、電子テキストを用いることによって、『後書き』における〈救い (Salighed)〉の本質的特徴*30を書き取っています。これは、キェルケゴールのデシマーン語テキストに基づいて分析を行った、*Sophia* における最初の論文です。

1990年代の *Sophia* の諸論文は、他の著名な思想家との関係の中にキェルケゴール思想を据えようとします。例えば、カーティス・トンプソン (Curtis Thompson) は、キェルケゴールとヘーゲルにおける「宗教の終焉」という主題を探究しています。彼は、両思想家における密接な対応を見出すために、このフレーズを次の三つの意味で用いています：(1) 消滅としての終焉；(2) 帰結としての終焉；(3) 目的としての終焉。キェルケゴールに関して言えば、これらの三つの終焉はそれぞれ：(1) キリスト教はキリスト教界において終焉する；(2) 宗教性Aと宗教性Bは宗教性Cにおいて止揚される；(3) 宗教の目的は情熱を強めることである、なぜなら実存的パトスの度合いは自己の度

*29 *Ibid* p.16.

*30 Abraham H. Kahn, "Happiness in Kierkegaard's Efterskrift," *Sophia*, vol. 22 no. 1, April 1983, p. 37.

合いに応じて高まるからである^{*31}。

キェルケゴールに関する論文を *Sophia* に二本書いた著者は、アブラヒム・カーンだけです。彼の二本目の論文は、「キェルケゴールとロックを並べることによって、『二つの時代』というキェルケゴールの文学批判に内在する政治理論を精査します。キェルケゴールの理論において基礎をなすのは、個人性の考えであり、これは、意志、平等、自律という三つの相互に連動する諸概念に拠ります。またこの考えは、宗教と政治の関係に関するキェルケゴールの理解に、さらなる照明を当てることになる、権威と統率力の観念を支え」^{*32}ます。

マシュー・ジャコビー (Matthew Jacoby) の論文は、「キリスト教の教義の本質に関するキェルケゴールの考えを、ジョージ・リンドベックの教義の〈統制理論〉」^{*33}に結びつけるスティーブン・エマニュエル (Steven Emmanuel) を批判するものです。ジャコビーは、「[キェルケゴールとリンドベックの] 二人は、キリスト教はその本質において第一義的に命題的なものではないという事実を強調している」という点についてはエマニュエルに同意しながらも、キェルケゴールにとってのキリスト教的真理は、第一義的に生のルールに関するものである、という考え方には反対します。むしろ、キェルケゴールにとってのキリスト教的真理はその本質において関係的なものである、とジャコビーは考えます^{*34}。

Sophia でキェルケゴールに言及する者で、オーストラリア出身者は二人だけです^{*35}。アレクサンダー・ボイス・ギブソンとマシュー・ジャコビーと

^{*31} Curtis L. Thompson, "The End of Religion in Hegel and Kierkegaard," *Sophia*, vol. 33 no. 2, July 1994, p. 14.

^{*32} Abraham H. Kahn, "Kierkegaard on Authority and Leadership: Political Logic in Religious Thought," *Sophia*, vol. 33 no. 3, November 1994, p. 74.

^{*33} Matthew Jacoby, "Kierkegaard and the Nature of Truth," *Sophia*, vol. 38 no. 1, March-April 1999, p. 74. と Steven Emmanuel's position is articulated in his book, *Kierkegaard and the Concept of Revelation*, Albany: SUNY Press 1996. に詳論されている。

^{*34} Matthew Jacoby, *op. cit.* p. 76.

^{*35} 二人のオーストラリア人著作家とはアレクサンダー・ボイス・ギブソンとマシュー・ジャコビーを指す。

いう二人のオーストラリア人ですら、専ら、オーストラリア的ではない主題に焦点を当てています。キェルケゴールの哲学的神学を分析哲学に同化させるという論理分析の使用が、オーストラリア的なスタイルをもつ限りでは話は別ですが、*Sophia* におけるキェルケゴール解釈の動向は、オーストラリア哲学よりも、アメリカやイギリスで起こっていることによって多分に規定されてきました。

4. 個人と組織：オーストラリアのキェルケゴール受容においてジュリア・ワトキンが果たした役割

ジュリア・ワトキンは、オーストラリアの哲学科にポストを得たキェルケゴール学者の中で、最も精力的で最も影響力がありました。彼女は、1994年から引退する2003年まで、タスマニア大学ローンセストン・キャンパスに勤務しました。そのエネルギーと才能にもかかわらず、彼女は、オーストラリアよりもむしろ国外でずっと高く評価されました。ローンセストンは小さな街で、タスマニアはオーストラリア本土から離れています。ジュリアはそこにキェルケゴール研究グループを立ち上げ、オーストラリア・キェルケゴール協会を創設しました。しかし直接指導した学生達以外では、あまり大きな成果をあげることができませんでした。これは、ヨーロッパ本土の周縁の「マーケット・タウン」の中にあつたキェルケゴールの著作と、いくつかの点で類似していました。不幸にも、オーストラリア・キェルケゴール協会とキェルケゴール研究グループは、ジュリアの死後、活動を休止してしまいました。これらは、個人としてのジュリアに拠っていたのであり、今までのところ、自律的な組織となるのに十分なだけの勢いを得るには至っていません。ジュリアが与えた弾みをさらに大きなものへとするのには遅すぎるということはありませんが、しかし献身的な者たちが彼女と同様のエネルギーをもって専心することが必要です。

しかしジュリアは、キェルケゴール研究のための発展的な組織的基盤をオーストラリアに設立しようと、倦むことなく活動しました。1995年と

1996年に、彼女はオーストラリア哲学学会会議でキェルケゴール部会を開きました。1995年は、ジョン・ノリス (John Norris)、ジュリア・ワトキン、ウィリアム・マクドナルド、ピーター・ヴァーディ (Peter Vardy) によって研究発表がなされました。1996年の会議では、ジュリア・ワトキン、ウィリアム・マクドナルド、マリー・レイ (Murray Rae) によって研究発表がなされました。これらの研究は、その後、ジュリアが編集した *Søren Kierkegaard Society Bulletin* と、ロバート・パーキンス (Robert Perkins) が編集した *International Kierkegaard Commentary* に収められました*³⁶。

ジュリアはまた、貴重な電子リソース *The International Kierkegaard Newsletter* も運営しました。ジュリアは、このリソースを何年も前にコペンハーゲンにおいてハードコピーで始めました。しかし自身が地球の裏側へと移ると、これをインターネットにのせ、グローバルに利用可能なものにしました。それは、世界のキェルケゴール文献、レクチャー、協会、電子リソース、会議、博士論文、メディア・イベントをリストアップしています。キェルケゴール研究界で国際的に起きていることについて情報を得るためには最高のウェブ・サイトでした。2004年、タスマニア大学でミラー・サイトを継続しながら、ジュリアは *The International Kierkegaard*

*³⁶ John Norris, "the Validity of A's View of Tragedy in Either/Or," in *Either/Or Part I*, ed. by Robert L. Perkins, Macon: Mercer University Press 1995 (*International Kierkegaard Commentary Volume 3*), pp. 143-157; Julia Watkin, "Judge William - A Christian?" in *Either/Or Part II*, ed. by Robert L. Perkins, Macon: Mercer University Press 1995 (*International Kierkegaard Commentary Volume 4*), pp. 113-124; William McDonald, "Confession as Mask," *Søren Kierkegaard Society Bulletin*, no. 1, August 1995, pp. 2-10; Peter Vardy, "An Evaluation of Approaches to Love in Either/Or," *Søren Kierkegaard Society Bulletin*, no. 2, April 1996, pp. 12-20; Julia Watkin, "Boom! The Earth is Round! - On the Impossibility of an Existential System" in *Concluding Unscientific Postscript to Philosophical Fragments*, ed. by Robert L. Perkins, Macon: Mercer University Press 1997 (*International Kierkegaard Commentary Volume 12*), pp. 95-114; William McDonald, "Retracing the Ruins of Hegel's Encyclopedia" in *Concluding Unscientific Postscript to Philosophical Fragments*, ed. by Robert L. Perkins, Macon: Mercer University Press 1997 (*International Kierkegaard Commentary Volume 12*), pp. 227-246; Murray Rae, "The Predicament of Error in Kierkegaard's Concluding Unscientific Postscript," *Søren Kierkegaard Society Bulletin*, no. 3, December 1996, pp. 2-8.

Newsletter を、セント・オラフ大学のホング・キェルケゴール図書館のウェブ・サイトに移しました^{*37}。ロバート・パーキンスやシルヴィア・ウォルシュ (Sylvia Walsh) といったジュリアの仕事を受け継ぐ者達や、ホング・キェルケゴール図書館館長のゴードン・マリノ (Gordon Marino) のおかげで、*The International Kierkegaard Newsletter* は 2006 年に再開されることになっています。また、ジュリアが生前編集していた 2005 年版については、現役の編集者のデイヴィッド・ポッセン (David Possen) が監修し完成させることになっています。

さらにジュリアはその努力によって、価値あるキェルケゴール・リソースの組織的基盤を創設しました。キェルケゴール・リソースのマランチュック記念コレクションです。これは、メルボルン大学のオーモンド・カレッジ内、合同神学図書館にあります。ジュリアは、自身の Ph. D のキェルケゴール研究をしていた当時から、これらのリソースを集めてきました。彼女は、デンマークで生活していた数年間も、コペンハーゲン大学の神学部にあるキェルケゴール図書館で研究しながら、これらを集め続けてきたのです。またジュリアは、リソースを集めただけでなく、リソースを生み出しもしました。『キェルケゴールの省略法と綴りのための鍵』^{*38}は、デンマーク語でキェルケゴールを研究する者にとって、最も価値があるものの一つでした。もう一つの貴重なリソースは、ジュリアの『キェルケゴール哲学の歴史事典』^{*39}です。ジュリアは、これをクリスチャン・モルベック (Christian Molbech) とルードヴィヒ・メイヤー (Ludvig Meyer) に献呈しました——彼らは、19 世紀のデンマーク語辞典の編纂者で、その業績は多くのキェルケゴール研究者にも

^{*37} *The International Kierkegaard Newsletter*: <http://www.stolaf.edu/collections/kierkegaard/watkin/newsletters.html> (ホング・キェルケゴール図書館サイト); <http://www.utas.edu.au/docs/humsoc/kierkegaard/newsletters.html> (タスマニア大学サイト)。

^{*38} Julia Watkin, *A Key to Kierkegaard's Abbreviations and Spelling - Nøgle til Kierkegaards Forkortelser og Stavemåde*, C. A. Reitzel, 1981.

^{*39} Julia Watkin, *Historical Dictionary of Kierkegaard's Philosophy*, Lanham, Maryland, & London: The Scarecrow Press, 2001.

大変な助力を与えてきたのですが、公にはほとんど認知されていません。またジュリアは、シンプルな『キェルケゴール』というタイトルで、キェルケゴールに関する明快な入門書を書きました*40。

ジュリアは、数多くの出版によって、そしてまたロバート・パーキンスが編集する *International Kierkegaard Commentary* シリーズに助言を与える国際委員会において役割を果たすことによって、その他の重要な国際的なキェルケゴール・リソースにも貢献しました。彼女は翻訳者としても優秀で、プリンストン大学出版の『キェルケゴール著作集』シリーズに『キェルケゴールの初期論争文集』の巻で貢献しました*41。ジュリアはまた、キェルケゴールが生前出版を控えたアドラーに関する本、『現代の宗教的混乱：アドラーについての本』を編集し、解説をつけて出版しました*42。

さらに最近では、キェルケゴール研究者が使えるようにと、彼女がインターネットに掲載していた『バレの教理問答』*43を翻訳しました。彼女はまた、例えばグレーテ・ケア (Grethe Kjær) の『『毎日の生活の物語』の著者、トマシーン・ギュレンブルグ』*44といった様々な論文や著作の一部を翻訳しました。他の人々が翻訳するのを優しく助けました*45。

キェルケゴールが単独者とコミュニケーションすることに非常に執着してい

*40 Julia Watkin, *Kierkegaard*, London: Geoffrey Chapman, 1997.

*41 *Early Polemical Writings: Kierkegaard's Writings Volume I*, edited & translated with Introduction & Notes by Julia Watkin, Princeton University Press, 1990.

*42 *Nutidens religiøse Forvirring: Bogen om Adler. Med indledning og noter ved Julia Watkin*, C. A. Reitzel, 1984.

*43 幼年期からのキェルケゴールに詳しい、この本のジュリアによる翻訳は、以下の URL で：<http://66.102.7.104/search?q=cache:xaPe4vtuu4gJ:www.utas.edu.au/docs/humsoc/kierkegaard/docs/Balleenglish.pdf+on+authority+and+revelation+julia+watkin\&hl=en>。

*44 Grethe Kjær, "Thomasine Gyllembourg, Author of A Story of Everyday Life," in *Early Polemical Writings*, ed. by Robert L. Perkins, Macon: Mercer University Press 1999 (*International Kierkegaard Commentary Volume I*).

*45 例えば、*Prefaces: Light Reading for Certain Classes as the Occasion May Require*, By Nicolaus Notabene, translated with an introduction & notes by William McDonald, Tallahassee: Florida State University Press, 1989. ジュリア・ワトキンとグレーテ・ケアの寛大で有力な助力がなければ、この翻訳は不可能であっただろう。

たことからすれば、キェルケゴール研究のための組織的基盤を創設しようとしたジュリアの懸命な努力には、何かしらのイロニーがあるように思われるかもしれません。しかしコミュニケートできるためには、キェルケゴールは、単独者にとってアクセスが可能でなければなりません。ジュリアは、非常に寛大なマランチュック記念コレクションの寄贈によって、また *The International Kierkegaard Newsletter* を通してキェルケゴール・リソースに関する情報を提供することによって、このアクセスを確保したのです。しかしおそらくもっと重要なのは、彼女の助力を求める多数の学者や生徒に対し、ジュリアは、大衆として関わることは決してなかったということでしょう。彼女はいつも、出会った人間の各々と、心を尽くしてコミュニケートしていました。ジュリアに出会う幸運を得た者に見れば、彼女が残してくれたのは、この人格的な関わりだろうと思います。この関わりにおいて彼女は、自身が深く愛した思想家の哲学を生きたのです。

(William McDonald, ニュー・イングランド大学)